

最期のことばの虚実

——ゲーテは死に際にほんとうに「もっと光を」と言ったか——

信 岡 資 生

1

中国の古典『論語』（泰伯篇）に「鳥のまさに死なんとする、その鳴くや哀し。人のまさに死なんとする、その言や善し」（曾子曰、鳥之将死其鳴也悲、人之将死其言也善）とある。鳥が死のうとするとき、その鳴き声は悲痛であるが、人は死ぬ間際になると、どんな悪人も本心に立ち返るから本当の事を言う、その死に際のことばに偽りはなく、真実である、という意味である。人間が死に臨んで口にする事ばに對する関心と、そのことばの尊重ないし重要視は、古今東西を問わず、世界に広く行なわれている人類共通の文化現象であって、文化が異なり、社会構造が異なり、地理的にも離れ、歴史的にも直接の接触関係が全く見られない、他には共通するものが全く存在しないようなさまざまな民族や共同社会が、最期のことばにだけは等しく特別に高い評価を与えてきている。いまわの際のことばは、「名言」として人口に膾炙して、事ある毎に引用され、時には人生教訓としての役割すら果たしている。卑近な例を挙げれば、平成9年7月31日付毎日新聞朝刊第一面の下の「余録」欄に、野村証券の総会屋に対する不正利益供与に続いて「山一」にも同様な疑惑が出たことに關連して、「『お前もか、ブルータス』のシーザーではないが、『お前もか、山一証券』といいたくなる。野村証券、第一勧銀に続く不祥事云々」とあった。この場合シーザーの最期のことばの譬えが当てはまるとすれば、共通点はせいぜい「こいつもか」という悪事への加担、連座の意味だけで、義理の息子

最期のことばの虚実

になるかもしれないブルータスに死の刃を向けられたシーザーの驚きと無念の思いとはかけ離れていよう。ちなみに言えばこのことば自体も、シーザー本人が実際に洩らした歴史的事実ではなく、シェイクスピアの創作らしく、岩波文庫『ジュリアス・シーザー』（昭和26年）の中野好夫氏の註解に、「出所はスエトニウス「シーザー列傳」が、ギリシャ語で「して汝、わが息子もか」と傳へているのによる。（プルタークには見えず。）Et tu, Brute といふラテン形は、シェイクスピア当時シーザーの死がラテン語劇や英語の劇で数多く取扱はれ、それらに上記スエトニウス記載の臨終の言葉の記述のラテン語譯が常に使用され、シェイクスピアの記憶にあったものと思へる」（191頁）と記されている。この他『読売「大相撲」12月号』（1997年 読売新聞社）の『激辛怒俵』（125頁）に、有望力士の負傷休場の続出に関連して「「出島よ、お前もか」——九州場所七日目の玉春日戦で左足首を痛め休場した新関脇には、思わずこう叫ばざるを得なかった」、また、平成9年10月2日に放映された「日本テレビ」の人気番組『笑点』で、司会者三遊亭円楽の出題に、「ゲーテの最期のことば『もっと光を』をもじって、『もっと〇〇を』と言ってみてください」等々、最期のことばはこのように誤用、あるいは乱用されるまでにポピュラーになっているのである。

ドイツの作家ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin. 1892-1940) は、『物語作者』(Der Erzähler. 1977) というエッセーの中で、臨終に際してはじめて、人間の生は「伝承に値する形式」を得て、「極悪人といえども、死に臨めば周囲の生きる人々に対し権威」を持つ (Schriften II : 2. Frankfurt 1977. S. 449-450), と記している。人の最期には近親者ばかりでなく、有名人ともなれば世間一般からの敬意を籠めた眼差しが注がれる。そして臨終のことばには、生前に話したすべてのことばにまさるほどの重み加わるのである。シェイクスピアの戯曲『リチャード二世』でも、瀕死のジョン・オブ・ゴントが、「死に行くものことばは、莊嚴な音楽

のように、人の耳を傾けさせずにはおかぬ…人の臨終はそれまでの全生涯よりも注目を浴びるものだ…」と言い、だから「リチャードも、おれの生前の意見には耳をかさなかったが、おれのいまわの説諭には耳を開いてくれるといいのだが」¹⁾ (第2幕第1場)と期待する。それにまた、昔から死んでゆく者は嘘をつかない、という固い信仰がある。何人も唇に虚偽のことばを残してあの世へゆくことはないのである。「死にゆく者は偽らずと推定される」(Nemo moriturus praesumitur mentiri) は、英国のコモン・ローの原則にもなっていて、死んでゆく者の臨終の床での、口頭もしくは文書による申し立て、「ダイイング・デクラレイション」は、制限付きではあるが、裁判での証拠資料として認められてきた。瀕死の人間は何故嘘をつかないか。それは真実以外のことを言う世俗的動機がない、つまり嘘を言ってももはや現世で何の得にもならないし、神の慈悲を失うだけだからである。シェイクスピアの『ジョン王』で、メルーン伯のダイイング・スピーチがそのことを言い表わしている。

その私がなんでいまさら偽りなど言おうか、
偽ってもなんの役にも立たぬ身であるのに？
なんで嘘などつこうか、真実を語ることによって
この世を去ってもあの世で生きようとしているこの私が？

(第5幕第4場)

キリスト教の教えには最後の審判があり、嘘を口にして死ぬのは地獄落ちの大罪である。仏教の教えでも、嘘をつくると地獄で閻魔大王に釘抜きで舌を抜かれる。ミステリー小説ではよく、殺人の被害者が書き残す血のダ

1) 引用は、小田島雄志訳『白水Uブックス シェイクスピア全集』(白水社1983)の『リチャード二世』による。次の『ジョン王』及び『オセロー』の引用も同じ全集による。

イイング・メッセージが犯人捜査の重要な手がかりとなるが、これも死んでゆく人は嘘をつかないという共通の認識が作者と読者の間に前提としてあるからである。レッシングの戯曲『エミリア・ガロッティ』では、策士マリネルリが人を使ってアピアーニ伯爵の馬車を襲撃して彼を殺す。その直後、マリネルリと出会ったガロッティの母クラウディアが、「マリネルリという名前が瀕死の伯爵の最期のことばだった」（第3幕第8場）と言って暗にマリネルリを告発するのを、マリネルリはこれを逆手にとり、自分は前々から伯爵の親友だった、だから、彼が死に際に自分の名前を呼んだということは——つまり、彼は自分に仇を打つよう頼んだのだ、と言い逃れる（第5幕第5場）。マリネルリは、死にゆく者の最期のことばは真実であるという思考慣習を巧く使って、疑念をそらそうとするのである。またシェイクスピアの戯曲『オセロー』でも、主人公のオセローが嫉妬心に駆られて妻のデズデモーナに、お前にやった大切なハンカチをキャシオーにやったな？と詰問して、「いいか、おまえ、いいか、偽りの誓いをするな、おまえは死の床にあるのだぞ」と注意を与える。彼女が嘘をついていると信じたオセローは、彼女の首を締めて立ち去る。エミリアが、「ああ、だれです、こんなことを？」と問うのに対して、デズデモーナは、「だれでもない、この私よ」と言って息絶える（第5幕第2場）。オセローは、彼女の嘘によって容疑を逃れ、彼女は地獄落ちの大罪を犯してまでも一人の男への愛を貫くのであるが、彼も、彼女も、また観客も、嘘について死ぬのは地獄落ちの大罪であることを知っているからこそ、この場面が劇的効果を盛り上げるのである。ある落語家が「おれのイサンはあの金庫の中に入っている」と言って亡くなる。弟子たちが師匠の死後、件の金庫を開けてみたら大田胃散の缶が入っていた、という話は、それ自体が落語であるが、たまにはふざけた奴がいて、嘘や冗談を言い遺して死んで、生き残った人たちを煙にまいてもよさそうであるが、そういう不心得な者はめったにいない。最期のことばは、なにしろ最後のことばであるから、あとで

取り消しができない、あれは冗談だった、嘘だったと言い直しがきかないからであろう。吉行淳之介は、最後の入院となった病院に入った当座は、よく死んだ真似をして家族の者を驚かせて喜んでいたそうであるが、いよいよ本当に死ぬときは何も言わなかった、「最期のことばなどはなかった」²⁾ という長男龍之介氏の談話が平成8年9月30日付『毎日新聞』及び『読売新聞』の朝刊に出ていた。

2

人間の生涯最後の発言には、何故このように畏敬の念が払われ、尊重されるのであろうか。まず第一に言えることは、ある一つの生の本性は、つまり真の自己は、死において正確に現われるという考え方、死による生の確認の考え方が、古来広く流布しているという事実である。この考え方によれば、一つの生は誕生から死に至るまで、矛盾なく首尾一貫して完結する。ゲーテも『詩と真実』の序言で、「[[個人が]」どのような境遇にあっても、どの程度同一者として変わらなかったか」を描くことを、伝記の任務としている。人は生きてきたように、生きてきたままに死ぬ、生あるごとく死ありとは、ギリシャ・ローマの昔から言い古されてきていることばで、古代ギリシャの政治家エパメイノンダス (Epameinōndas. ?—前362) は、「人間の評価の仕方はその人の死が教えてくれる」と言った³⁾。モンテーニュも『エッセー』に、「人を判断するにはその人の最後の言動を知るにしくはない」(I-19, 20) と書いている。死の瞬間に人は真の顔を見せるからというわけである。現代でも、1990年のノーベル文学賞の受賞者メキシコのオクタヴィオ・パス (Octavio Paz) は、『諸聖人、死者の日』についてのエッセイに、「死は生を明らかにする。死が無意味であれば、生もまた無

2) 関係者にわざわざ「最期のことばはなかった」と語らせること自体、有名人の最期に寄せる世人の関心の高さを物語っていると見えよう。

3) Karl S. Guthke: *Letzte Worte. Variationen über ein Thema der Kulturgeschichte des Westens*. München, C. H. Beck 1990. S. 31 による。

意味になる。……死は生と同様人に譲渡できない。……『汝がどのように死ぬかを言え、そうすれば汝が誰であるかを言ってやろう』(*The Labyrinth of Solitude*. New York 1961. p. 54) と書いている。永六輔も最近のベスト・セラーとなった『大往生』(岩波新書 1994年)の中に、「死に就つてのは、生き方です」(89頁)と書いている。首尾一貫した生の仕上げ、矛盾なく完結する生を封印する署名が最期のことばなのである。最期のことばはその生の本来の実体を明かすアイデンティティの表現、ということになる。ドイツのジャーナリスト、ヘルバート・ネッテ (Herbert Nette) が編んだ最期のことばのアンソロジー『この世にいつまでもとどまるわけにはゆかないではないか』(*Hier kann ich doch nicht bleiben*. München, dtv 1983)の表紙裏に、「最期のことばは生きた人々について、また彼らの生きた人生について、実に多くのことを教えてくれる。最期のことばには生存のレジユメのようなものが期待されるが、死んでゆく者の中には後世の人々の要望に答えてくれる人が多い」⁴⁾と書かれているのが印象深い。感銘を受けるほど矛盾なく首尾一貫した生は、特徴ある最期のことばの中に、その人が今しも終えんとする生のモットーを遺している——いずれにしても幾世紀このかた西欧世界ではこのように信じられ、期待されてきたのである。

ゲーテ畢生の大作『ファウスト』の主人公であるファウストの最期を見てみると、ファウストは、最後に理想国家を夢見て死ぬ。

おれもそのような群衆をながめ、
自由な土地に自由な民と共に住みたい。
そうになったら、瞬間に向ってこう呼びかけてもよからう、
留まれ、お前はいかにも美しいと。

4) Horst Rüdiger (ボン大学名誉教授 比較文学者) のことば。 *Neue Züricher Zeitung*, 21. Oktober 1971. S. 35 からの転載。

最期のことばの虚実

この世におけるおれの生涯の痕跡は、
幾千代を経ても滅びはすまい。――

このような高い幸福を予感しながら、
おれはいま最高の瞬間を味わうのだ。

11579-11586

(岩波文庫『ファウスト 第二部』相良守峯訳)

こう言ってファウストは倒れる。つまりはこれがファウストの最期のせりふとなる。それはこのせりふが、先に悪魔メフィストーフェレスとの賭があって、口にしてはならないものであったからである。

私がある瞬間に対して、留まれ、
お前はいかにも美しい、といったら、
もう君は私を縛りあげてもよい、
もう私はよろこんで滅びよう。

……

私の一生は終りを告げるのだ。

1699-1705

(岩波文庫『ファウスト 第一部』相良守峯訳)

これが約束、賭の条件だったのである。だから彼はこのことば「留まれ、お前はいかにも美しい」と言ったばかりに倒れた。しかしよく考えてみると、ファウストは現実の瞬間を見て、留まれ、お前はいかにも美しいと言ったわけではない。[もしも] そうなったら……こう呼びかけてもよからう、と言ったのである。ファウストは夢の実現を目のあたりにして死ぬのではない。実現の接近を現実と錯覚して、あるいは賭の相手メフィストーフェレスの早合点から、気の毒にも命を落とすのであるが、ただ、上述の最期のことばの観点からすれば、このことばがファウストの首尾一貫した生の完成の署名（サイン）である。つまりファウストの一生は、いろいろ

と迷いや矛盾に満ちたものではあったが、自由の土地、人々が自由な生活を享受する国の夢を追う一生であったということである。それに、「この世におけるおれの生涯の痕跡は、幾千代を経ても滅びはすまい」というせりふは見逃せない。人間の心の中には誰しも、多かれ少なかれこうした自己超越の衝動が、この地上での限りある時間を止揚して超時間性の中で生きたい、現世のはかない無常を止揚して永遠の中で未来永劫に生きたいというファウスト的野望が潜んでいる。その野望を叶えてくれる可能性が最期のことばに賭けられるのではあるまいか。死にゆく者は、生き残る人々の記憶に残るような最期のことばを遺すことによって、一種の世俗的不死の身分になれるかもしれないのである。これが最期のことばの尊重の背後にある、死にゆく者の側からの事情と言えよう。死にゆく者が、自己の人生体験から得た貴重な知識・英知を後世に伝えて、自己の属した共同社会の集団意識に何らかの貢献をして、人々の記憶の中に永久に残りたいと願うのも、また当然と言えるであろう。

3

ところで最期のことばの定義であるが、本稿の表題では「さいご」の「ご」の字には末期の「ご」を使った。絶命の際のことばの意味である。一方「うしろ」の字を使う「最後」もあるが、こちらは例えば「私の聞いた最後の」ことばであるとか、「彼が部屋を出るときの最後の」ことばというふうに、必ずしも「人生最後の」の意味にならないと思うからである。しかし『広辞苑』によれば、「うしろ」の「最後」にも、末期の意味があるように(②臨終。死。最期(き)。996頁)記されている。いずれにせよ「さいごのことば」といえば臨終の際のことば、人間がその人生で一番終りに口にするこば、人生というドラマの幕切れのせりふである。これを時間的に厳密にとると、絶命寸前のことばであり、これを言った後でもう他のことばを言うてはならない、もし言えばそちらが最期のことばにな

ってしまう。スイスの詩人で生理学者でもあったアルブレヒト・フォン・ハラー (Albrecht von Haller. 1708–1777) は、自分の手で自分の脈をとり、喘ぎながら「ある、ある、ある——あ、止まった」と言って亡くなったそうであるが⁵⁾、これは医術の心得があればこそ可能な業で、普通の人間にはこうした芸当はできない。凡人には自分がいつの時点で死ぬかは分からない。死ぬ時点が分からなければ、どれが最期のことばになるかも分からないわけである。だとすれば、後世のために最期のことばを残すというのは至難の技と言えよう。また最期の名文句を受け取る側に立っても、それが確かに本当に最後の最期のことばであったろうと納得できる最期のことばというのは、自殺者か刑死者の場合であろう。例えば、ウィーンの俳優で批評家でもあった自由主義者エゴン・フリーデル (Egon Friedell. 1878–1938) は、ゲシュタポに踏み込まれたアパートの窓から、「危ないよ、どいてくれ」と言いながら真逆様に落ちていったという⁶⁾。また、日本では辞世の歌という伝統があって、多くの文人や武将が刑場や切腹の場で詠んだ有名な辞世の歌がある。これらも——おそらく事前に練り上げて作られていたとしても——確かに最期のことばだったであろうと納得できよう。あるいはまた、偶然最後となったことば、例えばワシントンのフォード劇場で、夫人と喜劇『わがアメリカのいとこ』を観劇中に撃たれたアメリカ16代大統領リンカーンの最後のことば、それは夫人が、「私たちがこうしてボックス席で手を握り合っているのを見て、他の観客のみんなが笑うのではないのでしょうか」と言ったのに答えて、「みんなそんなことは毛頭考えていないよ (They won't think anything about it.)」⁷⁾ ——結果的にみれば

5) Guthke (注 3), S. 7 による。

6) 同上書 S. 17 による。

7) Jonathon Green: *Famous Last Words*. London, Omnibus Press 1979. S. 75. なお、リンカーンは狙撃されて即死したのではない。彼は病院へ運ばれ、撃たれた翌日 (1864年4月15日) の朝に死亡したが、その間にもはや一言も発しなかった。岩波新書『リンカーン——その生涯と思想——』K. C. ホイアー著 小原敬士・本田創造訳 (昭和32年) 279–281頁を参照。

最期のことばの虚実

このことば自体なかなか意味深長である——というものであるが、これなども厳密に最期のことばだったと、無理なく思われる。しかし、一般に世間に伝承されている最期のことばなるものは、必ずしもこうした時間的に、また順序の点でも、厳密な意味での最後の最期のことばではないことが多いようである。

世間に伝わる有名な最期のことばとされているものが、このような厳密な意味で最期のことばであるかどうか、有名な最期のことばの例として、ゲーテの「もっと光を」を取り上げ、いわゆる「最期のことば」と言われているものの実体に迫ってみよう。「もっと光を」は、あまりにも有名であって、ゲーテの詩の一句も、作品の一行も読んだこともないような人でも、ゲーテと言えば「もっと光を」を連想するほど、よく知られていることばである。われわれ日本人に知られている西欧の有名な最期のことばとしては、おそらく先程引用のシーザーの「ブルータス、おまえもか」と並ぶ名文句であろう。平成9年12月4日付の読売新聞朝刊の第1面下欄の『編集手帳』にも、『「もっと光を」』は、ゲーテが臨終に発した言葉として知られている。『旅に病んで夢は枯野をかけ廻る』は、芭蕉の辞世の句といわれる。人生の幕切れの言葉はそれぞれに重い」とあった。しかしはたして本当に、ゲーテは「もっと光を」と言って息絶えたのか、彼は死に際にもっと他のことばを言わなかったのか、「もっと光を」と言ったとしても、現在われわれが、また多くのゲーテ崇拜者が思っているような象徴的な意味（例えば人類の啓蒙）を籠めてそう言ったのか、そもそもいったいだれがゲーテは臨終に「もっと光を」と言ったと言い始めたのか、確かな耳証人がいるのか——そういった、だれでも一度は抱いてみたくなる、野次馬じみた、ある意味では少々意地悪な疑問について検証して、「最期のことば」とは何なのかを考えてみたい。

「もっと光を」の出所としては、まず、ゲーテの臨終に立ち会ったワイマル公国土木建築局長のクドレー (Clemens Wenzeslaus Coudray. 1775–1845) の手記『ゲーテの生涯最後の三日間』(*Goethe's drei letzte Lebens-tage*) が挙げられる。このメモは、クドレーの女婿の法律顧問官ベルナー(Fr. Börner) の遺稿から、カール・ホルステン (Karl Holsten) が1889年にハイデルベルクで出版したもの⁸⁾ であるが、それによると、クドレーは1832年3月22日、即ちゲーテ死亡の当日朝7時頃、ゲーテの容態が気になって、ワイマルのアム・フラウエンプラーンのゲーテ邸を訪れる。彼の記述では、9時に病人はワイン入りの水を所望した。

彼はとても元気がよくなって光を欲しがった。というのも病人を落ち着かせておこうと部屋はすっかり暗くしてあったからである。そこで書斎の窓のブラインドが引き上げられた。ところが、ほどなくして彼の目は日差しが明かる過ぎて悩むようであった。というのも、彼は幾度も手を庇のように目の上にかざしたからである。そこで、彼が晩に読書するときよくかぶっていたような緑色の眼庇を彼に渡さねばならなくなった
.....

彼は紙が一枚床に落ちているのを見たような幻覚を起こしたらしく、「どうしてシラーの手紙をそこに置き放しにしておくのか」と問うた。そのあとすぐ、彼は〔召使の〕フリードリヒに大きな声で言いつけた。「もっと光が入るように、寝室の窓のシャッターを上げてくれ (Mach doch den Fensterladen im Schlafgemach auf, damit mehr Licht herein komme.)」。これが彼の聞き取れる最後のことばであった。⁹⁾

8) *Goethes Tod. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen*, herausgegeben von Carl Schüddekopf, erschienen im Insel-Verlag zu Leipzig 1907. S. 20 を参照。

フリードリヒ (Gottlieb Friedrich Krause) は、1824年からゲーテの召使を務めていて、常にゲーテの傍を離れずにいた人である。ちなみにこのメモの日付は3月24日——ゲーテ死亡の2日後となっている。

ところが今世紀初め、ワイマルの都市建築顧問官シュミット (B. Schmidt) なる人物が、クドレーの別のメモ、それも上述のメモの元となったと見られる原稿を所持しているのが判明して、ゲーテ学者シュデコップフ (Karl Schüddekopf. 1861-1917) がこれを自らが勤務するゲーテ＝シラー＝アルヒーフに収納させた¹⁰⁾。それはクドレーがだれかに口述筆記させたものらしく、日付がゲーテ死亡の当日の3月22日となっているのだが、これには問題の最期のことば「もっと光云々」が記されていない。即ち、このいわば初稿ないし元稿 (ursprüngliche Fassung)——これに対し上掲のほうは決定稿 (endgültige Fassung) と呼ばれている¹¹⁾——によると、クドレーが当日朝7時前にゲーテ宅を訪れてみると、ゲーテがベットの傍の肘掛椅子に座っていて、緑色の庇を冠って目を保護していたこと、9時頃ワイン入りの水を所望して、コップ一杯を三口で飲んだ、それから今日は何日かと尋ね、しばらくまどろんだ後、今度は何時かと尋ね、10時との返事にナイフとフォークを要求し、チキンを少々食べて飲物を欲しがった。召使のフリードリヒがワイン入りの水を渡すと、ゲーテは「おまえまさかワインに砂糖を入れなかったらうな」と言いながら少しだけ飲んだ。そして食べたチキンをまた吐き戻した。そしてまたまどろんで、今度は宙に字を

9) 同上書 S. 100-101.

10) 同上書 S. 165.

11) この二つのクドレーのメモの引用は、*Goethes Gespräche. Eine Sammlung zeitgenössischer Berichte aus seinem Umgang auf Grund der Ausgabe und des Nachlasses von Flodoard Freiherrn von Biedermann, ergänzt und herausgegeben von Wolfgang Herwig. Artemis Verlag Zürich und Stuttgart 1965. Dritter Band* に、*Goethes letzte Lebenstage und Tod betreffende Notizen* からとして (Nr. 7015, 7016)、また、*Goethes Leben von Tag zu Tag. Eine dokumentarische Chronik, von Robert Steiger. Zürich, Artemis Verlag 1982-. Band VIII. S. 612-615* にも掲載されているが、いずれも ursprüngliche Fassung, endgültige Fassung の区別がつけられている。

最期のことばの虚実

書き始めた、……となっている。宙に字を書いたことについてはのちほど触れるが、クドレーはそのあと、ゲーテの座っていた肘掛椅子の右側に立ち、ゲーテの手の指がしだいに青ざめ、目の光が消え、呼吸が止まってゆくさまを、胸を早鐘のように打たせながら目撃したと記しているが、最期のことばには一言も触れるところがない。クドレーはいったい何故あとになって、つまり2日後にこの重要な最期のことば「もっと光を」を思い起こして、決定稿に記入したのであろうか。

クドレーはその間に、臨終時にやはりゲーテ邸に詰めていた、ゲーテの遺言の執行人にもなった司法長官フォン・ミュラー (Friedrich Theodor Adam Heinrich von Müller. 1779-1849) と話し合っ、彼から聞いたか、もしくは両人で確認し合ったとも考えられる。それはミュラー長官が、ゲーテの友人ツェルター (Carl Friedrich Zelter) 宛ての手紙に、次のように書いているからである。

彼は全く死を予感せず、最後の朝まで頭もしっかりして自覚があり、話をしていました。最後のときにもまだ彼はワイン入りの水を、「グラスにワインを入れ過ぎてはいないか」と問いながら飲みました。そのあと直ぐ、まどろみ半分だった目を見開いて、「もっと光が入り込むように部屋の窓のシャッターを上げてくれ (Macht doch den Fensterladen in der Stube auf, damit mehr Licht hereinkomme!)」と。これが私の聞いた最後のことばでした。ただ呼吸が詰まって止まったので死んだと分かりました。ひきつりも痙攣もなく、これ以上望めないほど安らかな死でした。(Goethes Gespräche. hg. v. Flodoard von Biedermann, ergänzt v. Wolfgang Herwig. Bd. 3/2. Zürich 1972. S. 902)

ただし、これはゲーテが死んで一週間後の3月29日の日付である。また、ミュラー長官は、ゲーテが死亡した翌々日3月24日付けの手紙を、宮廷女

官カロリーネ・フォン・エグロフシュタイン (Caroline von Egloffstein) と、フォン・ボリウ＝マルコナイ男爵夫人 (Frau von Beaulieu-Marconnay) に宛てて書いているが¹²⁾、どちらもゲーテの最期のことばについては全く言及していないので、彼がクドレーによって記憶を改めさせられた可能性もある。クドレーは、元稿に書いているように、3月22日朝7時頃ゲーテ宅を訪れたとき、ゲーテが緑色の庇を被って目を保護していたことを想起して、想像をめぐらしたのかもしれない。

他にもう一つ、ゲーテの熱狂的崇拜者ベッティナー・フォン・アルニム (Bettina von Arnim. 1785–1859) の『ゲーテとある子供との文通』(Goethe's *Briefwechsel mit einem Kind*. 1835) 中の『日記』(Tagebuch) に次の記述が見られる。

今朝私はミュラー長官から一通の手紙をもらったが、それにはゲーテについて次のように書いてあった。彼は実に幸せな死を遂げた、最後の吐息まで意識をもち、快活で、死を予感せず、苦痛もなかった。苦闘もなく、穏やかに生命の炎が徐々に弱まり消えていった。光が彼の最後の要求であった。最期の三十分前に彼は命じた。「もっと光が差し込むように窓のシャッターを上げよ」と。(Licht war seine letzte Forderung, eine halbe Stunde vor dem Ende befahl er: »die Fensterladen auf damit mehr Licht eindringe«.)¹³⁾

しかしこの日記には日付がなく、「今朝」とは何日の朝のことなのか分からない。そもそもベッティナーのこの書は、全体として、ゲーテの手紙に

12) Schüddekopf (注 8), S. 77–78. なおカロリーネ・フォン・エグロフシュタイン宛ての手紙については後でも触れる。

13) Bibliothek deutscher Klassiker 76. *Bettine von Arnim. Werke und Briefe* in vier Bänden. Hg. v. Walter Schmitz und Sibylle von Steinsdorff. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1992. Bd. 2. S. 565.

も自分の手紙にもかなり手を加えていて、いわば一種の創作と見られるものであるから、どこまで信用してよいか疑問である。ドルフ・シュテルンベルガー (Dolf Sternberger) は、ゲーテの最期のことばに関するさまざまな報告についての考察の中で、„Licht war seine letzte Forderung … damit mehr Licht eindringe“ の語調は、法律家としてのミュラー長官に似つかわしくなく、これは疑いもなくベッティナーの文体である¹⁴⁾、と断じている。ベッティナーが1832年4月初めにミュラー長官に宛てた長文の手紙¹⁵⁾が存在していて、その中で彼女は、ゲーテの死について知らせてもらったことについてお礼のことばを述べているから、ミュラーが彼女に手紙でゲーテの死を知らせたことは間違いないと思われるが、ゲーテの最期のことばが、それも彼女の言う通りに、書かれてあったかどうかは不明である。ドイツ古典作家文庫の4巻本ベッティナーの『作品と書簡集』(Frankfurt am Main 1992)の編者の注¹⁶⁾によると、ツェルター宛ての手紙と内容が一致するから信憑性があるとし、これはゲーテの最期のことばの伝説を作った最も早期の例証の一つである、としているが、むしろツェルター宛ての手紙と一致しているからこそ怪しいとも言えるであろう。

これと全く同文の英文が、ゲーテの死の翌年にロンドンで刊行された英国のゲーテ崇拜者サラ・オースティン (Sara Austin. 1793–1867) のゲーテの伝記にも引用されている。

‘Light’ was his last request. Half an hour before the end he said, ‘Open the

-
- 14) *Hauch, Laut und Einbildung*. Über die verschiedenen Berichte von Goethes letzten Worten. In: *Schriften I*. Über den Tod. Frankfurt am Main, Insel Verlag 1977. S. 41–42.
- 15) *Goethe und die Romantik*. Briefe mit Erläuterungen. 2. Theil. Carl Schüddekopf und Oskar Walzel. in: *Schriften der Goethe-Gesellschaft*. Im Auftrage des Vorstandes herausgegeben von Erich Schmidt und Vernhard Suphan. 14. Band. Weimar, Verlag der Goethe-Gesellschaft 1899. S. 279–283.
- 16) Bettine (注13), S. 1105.

shutters that more light may come into the room.’ These were his last words – prophetic, like his life. (*Characteristics of Goethe from the German of Falk, von Müller and others*. London 1833. vol. 3. 93 Not)¹⁷⁾

ただし、このオースティンの引用する手紙の宛名は、何故かミュラー長官とは別人、ピュックラー＝ムスカウ侯 (Fürst Pückler-Muskau)¹⁸⁾ になっている。ミュラー長官は全く同じ文面の手紙を二人に宛てて出したのであろうか。オースティンは『ゲーテとある子供との文通』を英語に翻訳したくて、ベッティーナと手紙で交渉している¹⁹⁾ から、ことによるとこれはベッティーナの『日記』からの引用かもしれない。しかも英文のほうには、ドイツ文にはない「彼の生涯のように予言的に」という文句が添えてあるのは、既にオースティンの主観が入っていると言えよう。

クドレーとフォン・ミュラーが、ゲーテの臨終の状況についてあとから話し合ったと仮定しても、両人の報告することばを比べてみると、直接引用の形式で書かれているにもかかわらず、命令形が違っているし (mach と macht)、また「寝室の」(im Schlafgemach) と「部屋の」(in der Stube) などにも微妙な差異が見受けられる。また、ミュラー自身の報告にしても、ツェルター宛ての手紙とベッティーナの『日記』に引用されている文を比較すると、窓のシャッターが単数 (den Fensterladen) だったり複数 (die Fensterladen) だったり、また光も「入ってくる」(herein kommen) と「差

17) Schüddekopf (注 8), S. 166 を参照。

18) Hermann Fürst von Pückler-Muskau, 1785–1871. プロイセン宰相ハルデンベルクの女婿。借財返済のため妻と離婚して英国の富豪の娘との再婚を企てて渡英、計画は失敗したが、その旅行記 *»Briefe eines Verstorbenen«* でスキャンダラスな評判を得た人物で、ドイツのバイロン卿を気取っていたという。ベッティーナは1832年1月以来彼と親交あり、ゲーテの死後取り戻した自分のゲーテ宛ての手紙を基に、彼女なりのゲーテ記念碑を建立する計画を早くから彼に打ち明けていた。*»Goethe's Briefwechsel mit einem Kind«* は彼に捧げられている。Bettine (注13), S. 898 以下を参照。

19) 同上書 S. 949 以下を参照。

し込む」(eindringen)の違が見受けられる。それに前者では「私の聞いた最後のことば」(die letzten Worte, die ich hörte)だった、となっている。

ともあれ、このことばを直接引用の形で記しているのは、ゲーテの死亡した際にゲーテ邸に居合わせた人々の中ではクドレーとミュラー長官の二人だけである。医師のフォーゲル (Carl Vogel)は、

「もっと光を」(Mehr Licht)というのが、あらゆる点で暗闇を常に嫌っていたこの人の最後のことばであったそうで、私が彼の死んだ部屋をちょっと離れていた間のことであった。(Die letzte Krankheit Goethe's. Berlin 1833)²⁰⁾

と、彼自身はそのことばを耳にしていない、と言っている。しかも、クドレーやフォン・ミュラーの引用することばを、「もっと光を」(Mehr Licht)と短縮して言っていることにも注目すべきである。ゲーテの死亡当日やはりゲーテの館にいた秘書役のエッカーマン (Johann Peter Eckermann)も、ゲーテの最後の恋人マリアンネ (Marianne von Willemer)宛てに彼の死亡時の状況を詳細に報じた手紙(3月23日付)²¹⁾を送っているが、これにも「もっと光を」と言ったことは書いていない。また3月26日の午後5時から行なわれたゲーテの埋葬式で、葬儀委員長を務めた公国宮廷司教ヨーハン・フリードリヒ・レール (Johann Friedrich Röhr)博士の弔辞²²⁾の中にも、生前のゲーテが口にした他のことばはいろいろ引用されているが、「もっと光を」は見当たらない。埋葬式に参加した貴族の一人カール・フォン・ボリウ＝マルコナイ (Freiherr Carl von Beaulieu=Marconnay)は、その『古

20) Manfred Wenzel: *Goethe und die Medizin*. Insel Taschenbuch, Frankfurt am Main und Leipzig 1992. S.109による。フォーゲルの手記は *Goethes Gespräche* (注11)にも掲載されている。

21) Schüddekopf (注8), S. 69-71.

22) Trauerworte bei Goethes Bestattung am 26sten März 1832. 同上書 S. 107-110.

きワイマルの思い出』(Erinnerungen an Alt-Weimar)の中で、かの有名な“光を、もっと光を!”(Licht, mehr Licht!)という最期のことばは、——ここではさらに激越な調子に短縮されている——当時はどこへ行っても話題になっていなかった²³⁾と述べている。

ワイマルのギュムナジウムの教師であったカール・ヴィルヘルム・ミュラー(Karl Wilhelm Müller. 1801-1874)は、ゲーテの死の直後、『ゲーテの最後の文学活動と外国との関係と逝去』(*Goethe's letzte literarische Thätigkeit, Verhältniß zum Ausland und Scheiden usw.* Jena 1832)を著わした。彼自身はゲーテの臨終には立ち会っていないのだから、これは多くの関係者から話を聞いてまとめたものと思われる。それにもかかわらず——ヨハンナ・ショーペンハウアー(Johanna Schopenhauer. 哲学者となったArthurの母)のことばを借りれば、ミュラー博士の本は追従の饒舌であり、ミュラー自身はうさん臭い人間で、ゲーテに近づいたことは一度もなかったが、それにもかかわらず臨終の様子は正しく描かれている、ということであるが²⁴⁾——それによると、

……部屋は病人を落ち着かせておこうとすっかり暗くしてあった。ところが彼は「光をくれ、暗いのは嫌だ」と言った。……

彼の心はそのあと、先に逝った友人シラーのことをしきりに思った。つまり彼は、一枚の紙が床の上に落ちているのを見ると、いったい何故シラーの手紙をここに置き放しにしておくのか、それを拾い上げてほしい、と言った。そのあと直ぐ、彼はフリードリヒに大声で言いつけた。「もっと光が入り込むように、部屋の窓のシャッターをもう一つ上げて

23) *Goethe-Jahrbuch*. Herausgegeben von Ludwig Geiger. Sechster Band. Frankfurt a/M. 1885. (Reprint Amsterdam/ John Benjamins N. V. 1967) S. 175.

24) *Goethes Gespräche*. Begründet von Woldemar Frhr. von Biedermann. Neu herausgegeben von Flodoard Frhr. von Biedermann. Band IV. Leipzig 1910. Anmerkungen & Nachträge. Nr. 3067a.

くれ」。これが彼の最後のことばであったと言われている。(»Macht doch den zweiten Fensterladen in der Stube auch auf, damit mehr *Licht herein-komme*. « Dies sollen seine letzten Worte gewesen sein.)²⁵⁾

となっている。彼も問題のことばを、やはり噂として記述している。ところが、これを読んだゲーテの召使のフリードリヒ・クラウゼは、メモを残していた。

彼が私の名前を最後に呼んだのはほんとうだが、それは窓のシャッターを上げさせるためではなく、彼は最後におまる (Botschanper) を求めたのであり、それをどうにか自分で受け取り、これをしっかり抱えたまま亡くなった。(Aufzeichnungen. 1928)²⁶⁾

このクラウゼのメモは、1928年競売にかけられたのを、ある好事家が35部複製したのであるが²⁷⁾、文学研究者も伝記作者も、特に Botschanper つまり pot de chambre に触れるのをはばかって、このクラウゼの報告を積極的に取り上げようとはしない。クラウゼは朴訥に事実経過を書き記したに過ぎず、これは事実であっても、臨床学的立場に立つのならいざ知らず、プライベートどころか、個人の生理的要求に関する事柄を文学史研究の領域から排除するのは当然であり、ゲーテが最後にクラウゼを呼んだのは窓の

25) *Goethes Gespräche* (注11), Nr. 7018. S. 888. なお、「窓のシャッターをもう一つ」については、先に挙げたクドレーの決定稿の引用の最初の節を振り返ってみるのがよいであろう。しかしシュデコップフの紹介する、当時のあるイェーナの新聞記事も参考になる。「しかし彼は、書斎の窓のシャッターが一つしか開いていないのに気付いたので、召使に言った、“もっと光が入るように、部屋の窓のシャッターをもう一つ開けてくれ!” と。これが彼の最期のことばだった、と言われている。しかし別のことばを挙げる者も何人かいる」(*Jenaische Allgemeine Literatur-Zeitung*, Intelligenzblatt 38 vom Juni 1832) Schüddekopf (注 8), S. 27.

26) 同上書 Nr. 7019. S. 889.

27) *Sternberger* (注14), S. 42.

鎧戸を開けさせるためではなかった、ということを知るだけで充分であろう。

この他、ゲーテ・ファンの一人イエニー・フォン・パッペンハイム (Jenny von Pappenheim)²⁸⁾ が、

有名なことば「もっと光を」を彼は言ったのかもしれないが、しかし彼は明瞭にはっきりと最期のことばをこう言った。「さあいよいよより高い変化への変化がやってきた (Nun kommt die Wandlung zu höheren Wandlungen.)」(Aus Goethes Freundeskreise. Braunschweig 1892. S. 84)²⁹⁾

と主張している。これは『ゲーテ談話録』(Goethes Gespräche) の第2版 (1910) (注24参照) には載っていたのだが、編者のビーダーマンは、「このことばはその他の報告と並べてみると、ほんとうらしくない」とのコメントを付けていて、第3版からは削除された。悪くない、金言のようなことばであるが、臨終の人の口から出たことばとしては、まるで芝居の台詞のようで、あまりにも出来過ぎている感じがする。それに、彼女もゲーテの臨終の場には居合わせなかったし、彼女がこのように主張する根拠も不明である。

ここでゲーテの臨終にゲーテ邸内³⁰⁾に居合わせた人の名を挙げておくと、以下の通りである。

寝室 (Schlafzimmer):

ゲーテ夫人 (ゲーテの息子アウグストの嫁オットーリエ)

-
- 28) 1811-1890. ナポレオンの末弟ジェロームが女官との間に設けた庶子で、晩年のゲーテに親しみ、ゲーテを連れ出そうと仕事中に押しかけて彼からお小言をくらったり、ゲーテの誕生祝いに手編みのスリッパに詩を添えて贈って彼を喜ばせたりしていた。
- 29) Schüddekopf (注 8), S. 28.
- 30) 277 (22) の見取り図参照。J. W. Goethe. Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. 23. Band. Zürich, Artemis Verlags-Ag. 1950. より。

最期のことばの虚実

召使フリードリヒ・クラウゼ

土木建築局長クドレー

秘書兼写字生ヨーン (John)

隣接する書斎 (Arbeitszimmer):

ゲーテの孫ヴァルター (Walther)³¹⁾ とヴォルフ (Wolf) (アウグストの息子)

宮廷顧問官リーマー (Riemer)

少し離れた部屋:

司法長官フォン・ミュラー

宮廷顧問官ソレ (Soret)

秘書クロイター (Kräuter)

秘書エッカーマン

医師フォーゲル

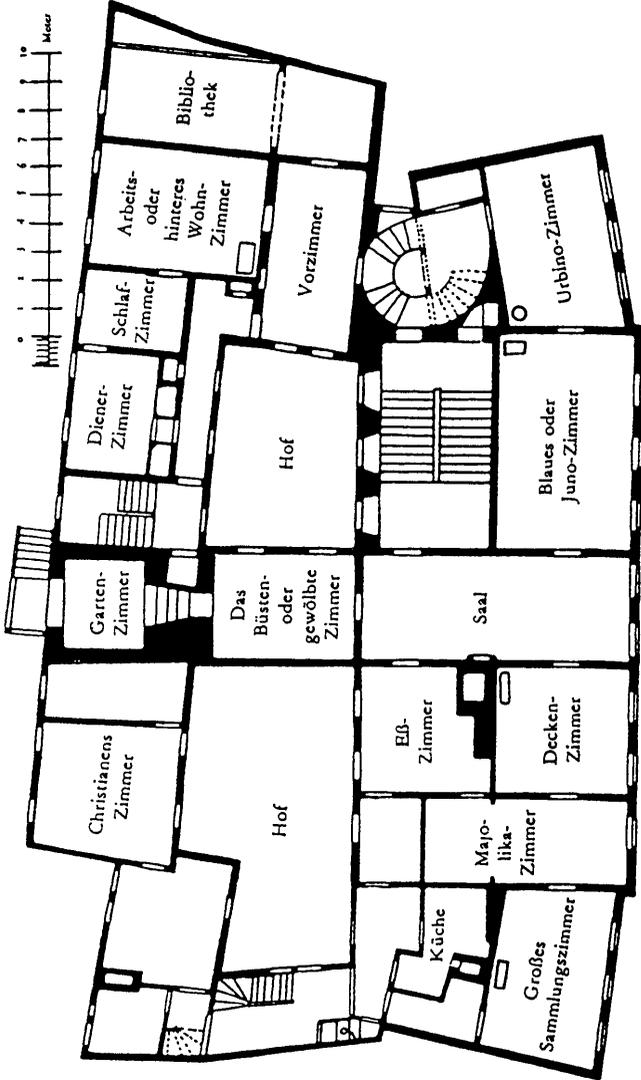
家庭教師ローテ (Rothe)

以上はクドレー、K. W. ミュラーの記録を合わせたものであるが、K. W. ミュラーの記すところでは、クドレーは書斎にいたことになっている。ゲーテ自身の妻クリスティアーネ (Christiane) は、この時点より16年以前の

31) Walther Wolfgang von Goethe. 1818–1885. ワイマルの侍従 (Kammerherr), 音楽家となった。シュデコップフは、ヴァルターが祖父ゲーテの最期のことばに関して洩らしたエピソードを次のように伝えている。ゲルロフ博士 (Dr. Gerloff) なる人物が1881年にヴァルターを訪ねたとき (*Tägliche Rundschau* 1899, Oktober 参照), このゲーテの孫は博士を案内して、当時立ち入り困難だったゲーテ邸内を回った。「ゲーテの書斎で」とゲルロフは語る、「ヴァルターは口数が少なくなり、その少ないことばもごく低い声で話した。そして彼は私の手を取り、ゲーテが亡くなった部屋の敷居まで連れて行ってくれたが、部屋の中へは入らなかった。彼は祖父の最後の日々様子を詳しく物語った。“ごらんなさい”と彼は言った、“太陽が照っていますね。そしてその反射で部屋の天井が少し緑色に輝いているでしょう。これを祖父は死の三日前ふと見なくなったのです。ところが窓のカーテンが引いてあって暗かったので、“もっと光を!”と言いました。このことばから愚かな人たちが例の最期のことばを作ったのです。でも祖父はそれから後でもまだたくさんことばを言ったのですよ」。Schüddekopf (注 8), S. 167.

最期のことばの虚実

図 1



最期のことばの虚実

1816年6月に既に他界している。また、息子のアウグスト (August) も一年半ほど前の1830年10月に亡くなっている。この他ジル (Carl Gille) のメモ³²⁾によると、寝室にもう一人、オットーリエの実家の妹ウルリーケ (Ulrike von Pogwisch) がいた。しかもカール・フォン・シュタイン (Gottlob Karl Wilhelm von Stein) が³³⁾、ゲーテに学んだフリッツ・フォン・シュタイン (Friedrich Konstantin von Stein) に宛てた手紙³³⁾には、ゲーテは彼女に、病気中の彼女の行き届いた世話に礼を述べたあと、肘掛椅子に座ったまま安らかに息を引き取った、と書いてある。

5

イエニー・フォン・パッペンハイムの主張するゲーテの最期のことばを裏付けする者は、彼女の他には誰もいないのであるが³⁴⁾、ゲーテが死に際に、未亡人となっていた息子の嫁のオットーリエ——ゲーテが常日頃“うさちゃん” (Seidenhäschchen) と呼んでいた——の手を求めたという話は、幾人もが報告していて、この文豪の臨終の逸話の中では、「もっと光を」に次いで好んで伝えられている。その一つが、女流画家ルイーゼ・ザイドラー (Luise Seidler) の次の報告である。ザイドラーはオットーリエをここでは“娘” (Tochter) と記している。

娘は隣室にこっそり控えていましたが、彼女が歩み寄るたびに彼は猫撫で声でいろいろ優しいことばをかけ、またあちらへ下がっているように言いつけるのでした。死亡当日の朝7時頃に彼はまだ彼女にファイルを持ってこさせ、一緒に色彩現象を試してみようと言って、そのことについていろいろ彼女に説明し、春の近づいたこと、春になったら早く病気から治りたいなどと話しました。——さらに彼はまだ何か書こうとし

32) *Goethes Gespräche* (注11), Nr. 7022. S. 890.

33) *Goethes Gespräche* (注24), Nr. 3072.

て机から紙を持って来させ、番号を打たせました。10時頃には彼はほとんどもう話すことを止め、二、三片言を言うだけとなりました。例えば、「私の傍へお座り、娘や、もっと傍へ」とか、そのあと、「あんたのお手々を頂戴 (gib mir dein liebes Pfötchen)」³⁴⁾

Pfötchen (Pfote の縮小名詞) は、愛玩動物の前足のことで、愛猫に向かって「はい、お手」という言い方を戯れに用いたのである。これはライブチヒの商人のクヴァント (Johann Gottlob von Quandt) に宛てた手紙で、日付は3月23日、ゲーテの死の翌日である。ザイドラーの手紙にはこれに続いて、ゲーテが息を引き取るまでオッティエリエが傍についてかいがいしく世話をし、彼の手を握っていたこと、息を引き取ったゲーテの目を閉じてやったのは彼女であったことなどを記している。ザイドラーもゲーテの臨終時にゲーテ邸内に居なかったのであるから、伝聞であろうが、居合わせた一人ソレ (Frédéric Jacob Soret. 自然科学者でワイマルの皇太子の家庭教師) も、カロリーネ・フォン・エグロフシュタイン宛ての3月25日付けの手紙にこの模様を書いている。この手紙はフランス語で書いてあるのだが、ゲーテのことばのところだけが「かわいい女房どの、お手々を頂戴 (Frauenzimmerchen! Frauenzimmerchen! Gib mir dein Pfötchen!)」³⁵⁾ と、ドイツ語で直接引用されている。その他、イエーナ大学教授夫人パウリーネ・ハーゼ (Pauline Hase) が、実家に宛てた3月22日付手紙でも、

彼はオッティエリエの腕に抱かれて死にました。それも、息がとても静かに安らかにとだえたので、彼女は死の瞬間がよく分からず、もう彼が死んでしまった後でも、まだ彼が眠っていると思い込んでいたほどでした。

34) Schüddekopf (注 8), S. 71.

35) *Goethes Gespräche* (注11), Nr. 7030. S. 901.

彼は最後までとても陽気であったようで、最期の前にも彼女に、「さあ、かわいい女房どの、あんたのお手々を頂戴 (Nun, Frauenzimmerchen, gib mir dein gutes Pfötchen!)」と言い、そして彼女の手をずっと握り続けていたので、彼女はとうとう亡骸から振り放さねばなりませんでした。³⁶⁾

と書き送っている。

この他にも、ゲーテが死に際にオットーリエに戯れのことばをかけていたことを書き知らせている人が少なからずいる。例えば、オットーリエの母ヘンリエッテ・フォン・ポグヴィツシュ (Henriette von Pogwisch, geb. Gräfin Henkel) は、ゲーテの弁護士シュロッサーの妻ゾフィー (Sophie Johanna Schlosser, geb. du Fay) 宛てに3月24日付けの手紙で、「死の2時間前でも彼はなおオットーリエにとっても明るい冗談を言っていました」³⁷⁾と書き送り、またアデーレ・ショーペンハウアーにも、「死の2時間前にも彼はまだとても愛想よくオットーリエをからかっていました」³⁸⁾と書き送っているし、書籍商F. J. フロムマン (Frommann) はフォン・レーヴ夫人 (Frau von Löw) に3月27日付けの手紙で、「木曜日 (3月22日) の朝でも彼は最近になく朗らかで、息苦しいため横になることができないので、椅子に座ってオットーリエに冗談を言い、自分の椅子の傍近くへだんだんすり寄らせて、何とも言えないほどの親しみを籠めて彼女の目をのぞき込み、彼女の手を握りしめ、十一時半に絶命してもなお放さないでいました。彼が彼女に言った最後のことばの一つは“あんたのお手々を頂戴 (Gib mir dein Pfötchen)”でした」³⁹⁾と書き送った。先にも述べたように、フォン・ミュラー長官もカロリーネ・フォン・エグロフシユタ

36) Schüddekopf (注 8), S. 92.

37) 同上書 S. 79.

38) *Goethes Gespräche* (注11), Nr. 7027. S. 893.

39) Schüddekopf (注 8), S. 80-81.

インに宛てて3月24日付で、「彼は、医師がもう見放してしまった9時頃にまだ、さすがに体力はすっかり弱っていましたが、オットーリーエに冗談を言っていました。彼の死は、痙攣も格闘もいっさいなしの、ただ呼吸が止まったただけでした」と書き知らせながら、最期のことば「もっと光を」に全く触れていないのは注目すべきである⁴⁰⁾。

生きてきたように死ぬ、死に方に生き方が表われる、という観点からすると、ゲーテが女性の手を求めて息絶えたというのは、たいそう意味深いことだと思われる。ライプチヒのケーチヘン・シェーンコップフ、アルザスの牧師の娘フリーデリケ・ブリオン、ヴェッツラーのシャルロッテ・ブッフ、シュタイン夫人、『西東詩集』のマリアンネ・ヴィレマー、更にはマリーエンバートの少女ウルリーケに至るまで、多くの女性との触れ合いによって自身を高め、『ファウスト』の最後を飾る名文句「永遠に女性的なるもの」(12110)に導かれた一生を送ったゲーテが、最後に女性の手を取って息を引き取ったというのは、とても象徴的である。事実、英国生まれのドイツ哲学者H. S. チェンバレンは、その『ゲーテ伝』(Houston Stewart Chamberlain: *Goethe*. Verlag von F. Bruckmann A.-G. München 1912)の中で、「信頼のおける記録を丹念に集め寄せてみるところ、瀕死のゲーテはあの指標的なことば“もっと光を”を言ってないことが、反論の余地なく確認される。彼の最後の意識あることばは、まめまめしく看護してくれた息子の嫁、未亡人に向けた“おいで、わが娘よ、ずっと近くへ座って、お手々をくれ (Komm, mein Töchterchen, setze Dich ganz nahe und gib mir ein Pfötchen!)”であった」(S. 80)とし、この終局場面に、最後までのエロス、崇高な「永遠なる愛の核心 (ewiger Liebe Kern——『ファウスト』第2部第5幕11864)」(S. 81)に思い当たっている。チェンバレンの他にも、このうわしい家族愛の物語に「もっと光を」以上に魅せられたゲーテ学者もいて、例えばヘルバート・ギェンターは、「彼の大きな暖かい目の眼

40) 同上書 S. 77. 注12を参照。

差しの中に最後まで、家族の中で一番彼の心に親しかった女性、つまりオッティーリエが彼の傍にいたこと、また、彼女に向けた彼の最後のことが軽いユーモアの響きに満ちていたことを思い浮かべることができるが、いっそう人間的である」(Herbert Günther: *Johann Wolfgang Goethe*. Mühlacker 1966. S. 227-228) と言う。

ただ、この「お手々」の物語も残念ながら傍証に乏しい。クドレーも、医師のフォーゲルも、召使のクラウゼもこのことを報告していない。しかし結局のところ、オッティーリエは臨終にゲーテのすぐ傍にいたのである。「お手々」のことが、他人にも聞こえるように大声で叫ばれたわけではなく、彼女にだけ聞こえるようにささやかれたのかもしれない。とすれば、この話の真相は、ささやかれた当人のオッティーリエだけが知っている、と言えよう。先に挙げたドルフ・シュテルンベルガーも、この話の源はオッティーリエ本人であると推測するが⁴¹⁾、ヴァイセンボルン (Dr. Wilhelm Weißenborn) が教え子のデ・フェー (Des Voeux) に宛てた3月28日付けの手紙の中の次の文句が、これを裏づけよう。

ゲーテ夫人 (オッティーリエ) はさる友人に、彼は死に際に彼女の手を握り、頭を彼女の胸にもたせかけ、彼女の目をじっと見つめたので、彼女はこれがいよいよ彼の最期のときだと思って、全身に広がるほどのある種の震えを覚えた、と話しました。⁴²⁾

次頁に掲げる当時のゲーテの死亡通知状には、「昨日午前十一時半わが愛する舅ザクセン大公国現職枢密顧問官兼国務大臣ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは、短期間の病気の後、神経性になったカタル熱の結果窒息性カタルのため」⁴³⁾ 亡くなったと書かれてある。ここではオッテ

41) Sternberger (注14), S. 44.

42) Schüddekopf (注 8), S. 85.

図 2

Gestern Vormittags halb Zwölf Uhr starb mein geliebter Schwiegervater, der Großherzogl. Sächsische wirkliche Geheime-Rath und Staatsminister

JOHANN WOLFGANG VON GOETHE,
nach kurzem Krankseyn, am Sticckfluß in Folge eines nervös gewordenen Katharrhalfiebers.

Geisteskräftig und liebevoll bis zum letzten Hauche, schied er von uns im drei und achtzigsten Lebensjahre.

Weimar, 23. März
1832.

OTTILIE, von GOETHE, geb. von POEWISCH,
zugleich im Namen meiner drei Kinder,
WALTHER, WOLF und ALMA von GOETHE.

イーリエは喪主として、3人の子供と共に名を連ね、彼は「最期の吐息に至るまで、精神がしっかりしていて優し」かった、と述懐している。

6

最期のことばではなく、最期のジェスチャーについては、離れていた人も目撃していた。先に挙げたクドレーの初稿にもそのことが記されている。

またもや静かにうとうとまどろみながらも、彼の精神は活動を続けていた。というのも、彼は、挙げた右手の中指で、宙に三行書き始めたのである。だが、力が失せてくるにつれてその手がだんだん下がり、とう

43) Wenzel (注20)によれば、ゲーテの死因は、インフルエンザが進行して肺炎を引き起こし、血液循環不全、更に肺水腫を伴う心筋梗塞としている (S. 104)。なお、ここに示した死亡通知状は、Schüddekopf (注 8)からの転載である。また、これとは別に、最初に作成した通知状があり、それには病因のカタル熱に「おり返した (zurückgeworfen)」という形容詞が添えてあったため、このままでは医師の不手際を暗示しかねないとの判断から、ここに示した通知状に改めて刷り直したという (Wenzel, S. 109)。

とう膝を覆う掛け毛布の上で何度も繰り返すようになった。この文の最初は大文字の W と分かったが、あとは字を判じることはできなかった。

「もっと光を」を直接耳にしなかった医師フォーゲルも、この仕種は見ていた。先に挙げた記録には次の記述が続いている。

そのあと、舌が考えの役に立たなくなってくると、彼は以前精神が何かある事柄に熱中してくるとよくやったように、右手の人差し指を使って何度も宙に文字を書いた。初めは高く、力が失せてくるとだんだん下がって、ついには膝の上に広げた毛布の上に書いた。幾度かは W や句読点だとはっきり分かった。

生きてきたままに死ぬ、のまさに作家・文豪としての模範例である。トーマス・マンはこの逸話にたいへん感動し、『作家としてのゲーテの経歴』(Goethes Laufbahn als Schriftsteller. 1932) という講演の冒頭で、「ゲーテは書きながら死んでゆきました。意識が朦朧として最後の夢を見続けていたあいだも、彼は、自筆である美しい、明快な、清潔な筆跡を示しながら、あるいは口述しながら、一生を通じてしてきたことをしていたのです。つまり、書き留めていたのです」⁴⁴⁾と語っている。この読み取れた W の字は、彼自身の名前 Wolfgang の頭文字とも、また彼の唱えた世界文学 (Weltliteratur) の W とも、あるいはまた世界 (Welt) の W とも解釈されている⁴⁵⁾。

ちなみに、字を書きながら死んだという話は、似たようなことが他の文人についても言い伝えがあり、昔に遡れば、キケロによるとプラトンは鉄

44) Thomas Mann: *Gesammelte Werke* in 13 Bänden. Frankfurt am Main, S. Fischer Verlag 1960. Band IX, S. 333. 訳文は、谷 友幸訳 (『トーマス・マン全集 IX 評論 1』新潮社 1971年) による。

45) Richard Friedenthal: *Goethe: Sein Leben und seine Zeit*. München 1963. S. 734.

筆を握ったまま亡くなった⁴⁶⁾という。また、ハイネも死の当日の午後ベッドで「書く、紙、ペン」とのうわ言を何度も繰り返した⁴⁷⁾、とされている。更に、ゲーテと並び称される文豪シラーについても同様のことが伝えられている。シラーの最期のことばについては、それ自体が一つのテーマになるが、『ゲッティンゲンの森の詩社』の同人の一人で、シラーの熱烈な崇拜者であったフォス (Johann Heinrich Voß) の報告によると、シラーは死の間際に「書こうとしたが、三文字しか書けなかった」(Max Hecker: *Schillers Tod und Bestattung*. Leipzig 1935. S. 88)⁴⁸⁾という。シラーについてはそればかりではない。シラーも、その末期に際して光を要求した。シラーの臨終に居合わせた人は、ゲーテのように大勢ではなく、シラー夫人のシャルロッテがベッドの傍らに、そしてシャルロッテの姉のカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンと医師フシュケ (Wilhelm Ernst Christian Huschke) がそのベッドの足許に立って、この三人だけであったが、その義姉のカロリーネの報告に、

私がベッドへ歩み寄り、気分はどう？と尋ねると、彼は私の手を握り、「ますますよく、ますます晴れ晴れとしてくる」と言った。……これが彼のいとしい唇から聞き取れた私に向けた最後のことばとなった。彼はカーテンを開けるようにと望んだ、陽光が見たいと。明るい眼差しで彼は美しい夕陽の陽射しを見つめ、自然も彼の別れの挨拶を受け入れた。

-
- 46) Guthke (注 3), S. 135 を参照。また、田中美知太郎責任編集『世界の名著 7 プラトンⅡ』中央公論社 (昭和44年) の年譜に、「前三四七年プラトン死す。キケロによれば「書きながら死んだ (scribens est mortuus)」(Cato, I. 58) とされ……」とある (488頁)。
- 47) Karl S. Guthke: *Last Words. Variations on a Theme in Cultural History*. Princeton, New Jersey 1992. p. 51 を参照。ハイネのうわ言の引用は Herbert Nette: »Hier kann ich doch nicht bleiben«. Eine Sammlung letzter Worte. dtv. München 1983. S. 85 による。
- 48) Karl S. Guthke: »Richter« oder »Leuchtöl«? Schillers letzte Worte in der Biographie. in: *Jahrbuch des freien deutschen Hochstifts 1992*. Herausgegeben von Christoph Perels. Tübingen, Max Niemeyer Verlag. S. 190 による。

最期のことばの虚実

(Caroline von Wolzogen : *Schillers Leben, verfaßt aus Erinnerungen der Familie, seinen eigenen Briefen und den Nachrichten seines Freundes Körner.* Bd. II. S. 275–279)⁴⁹⁾

とある。ただ、これはシラーの死の前日——1805年5月8日の夕べのことである。これをシラーの最期のことばと受け取るためには、「最期」の時間的許容範囲をかなり広く取って20時間ほど前まで広げなければならない。シラーの死んだのは翌9日午後3時過ぎのことで、カロリーネの記すところによると、彼は夫人シャルロッテの手をしっかりと握って亡くなった⁵⁰⁾。

シラーも、ゲーテと同様、死の前に光を欲しがったということは、上に述べたように時間的な問題点もあってか、あまり取り上げられない。ただ、英国の新聞記者でエッセイストのネヴィンソンは、『フリードリヒ・シラーの生涯』(Henry W. Nevinson : *The Life of Friedrich Schiller.* London 1889)で、シラーの最後の要請はゲーテと同じく光であったことを取り上げ、また、その『ゲーテ伝』(*Goethe : Man and Poet.* London 1931)でも、仲の良かった両詩人は死の点でも互いに似ていたと、両文豪が二十数年を飛び越えて感応し合い、共鳴し合ったことを強調している⁵¹⁾。

7

これまで述べてきたことからすると、ゲーテが、「部屋にもっと光が入るようにしてくれ」という意味の要請のことばを述べた可能性は充分あるが、それが死の間際であったか、と問われると、極めて疑わしい、と言わざるを得ないであろう。上掲のクドレーの決定稿にも、また、K. W. ミュラーの著述でも、ゲーテが死の当日の朝、人々が病人の安静を気遣って

49) 同上書 S. 197 による。

50) 同所 S. 198 による。

51) 同書 S. 200 による。

わざわざ暗くしておいた部屋を明るくしてほしいと要求したことが記されている。死の一、二時間前には、ゲーテはもう意識が朦朧としていて、ことばを発する状態になかったと考えるべきである⁵²⁾。また、ゲーテが言ったのは「部屋を明るく」の意味であって、直接には「窓のシャッターを上げてくれ」と言ったわけで、「もっと光が入るように」の副文の主語の mehr Licht が直接の要請に、つまり「もっと光が」が「もっと光を」と、主語が目的語に変えられて短縮された形で伝えられてきたのである。いずれにしても、この要請には特別な象徴的な意味はなく、例えば世人の啓蒙とは関係なく、それは単純自然に部屋の暗がりと関係したことであって、ゲーテは病人として、しごく当たり前に、部屋の暗さを嫌って日光の明かりを欲しがった、そしてそれを言ったのも召使のクラウゼに対してであって、人類一般への要請でもなければ、後世の人々に向けて言ったのでもなかったと思える。

しかしそうだとしても、これらのことによっても、「もっと光を」のことばが持つ象徴性はいささかも変わらない。偉人には臨終に際し、記憶に残るような立派な最期のことば、最期のジェスチャーが期待される。そして、英文学者アラン・シェルストンがその著『伝記』(Alan Shelston: *Biography*. London 1977) で述べるところでは、「確かに伝記作者は、あることば、特にある名言が、正真正銘最後のものであるか、またそもそもその通りの形で言われたかどうか疑わしい、あるいは疑問の可能性があると充分承知の上であっても、それでもなお含蓄に富むフィナーレは、それが最

52) この点については、K. O. コンラーディの大著『ゲーテ伝』の中のゲーテの最期に関する次の冷静な叙述が参考になる。「彼は肘掛椅子に座ってうつらうつら仮眠していた。少なからぬ関係者の主張するところでは、彼は他にもまだ幾つかわけの分からない片言を口にし、日付を尋ね、「では春が始まったのだ、私たちはそれならなおのこと早く回復できる」と言い、部屋に光が入るように窓の錠戸を開けさせた。どうやら彼は最後の時間には言葉が全く言えなくなっただけだ。しかし死の不安は全く持っていない……」(Karl Otto Conrady: *Goethe. Leben und Werk*. Frankfurt am Main, athenäum 1987. Zweiter Teil. S. 569)

もふさわしいし、生涯の歴史を理想的に締め括ることになるのだから、捨てたくない」(p. 14) のだそうである。シュルストンのこのことばは両刃の剣であって、裏を返せば、有名な人物にピッタリ合う最期のことばは、まさにそれ故にこそ怪しい、ということにもなりかねない。1997年8月末、パリで劇的な死を遂げたイギリスの元皇太子妃ダイアナについて、彼女の最期のことばなるものを新聞が後日報道した。「わたしを放っておいて (Leave me alone!)」⁵³⁾ というものであった。パパラッチーに追いかけてられ通しだった彼女にふさわしい、と噂されたが、素直にこれが本当に彼女の最期のことばだと受け取れるであろうか。偉人の立派な最期のことばなるものは、「たいてい、例外なく、死後の創作である」⁵⁴⁾ らしい。いかにもそれらしいからその人の最期のことばとなる、というわけであるが、しかし、そうした創作、伝説、神話を可能にするだけの偉大さが、亡くなった当人であったということでもある。何げない普通のことば、普通の人間が言ったとしたら全く注目されなかったであろうような、しごく平凡なことばも、偉大なゲーテなればこそ、尊重され、意味付けされ、象徴性を帯びるのである。多くのゲーテ研究者が言うように、例えば、ロバートソン (J. G. Robertson : *Goethe*. London 1927) が言うように、ゲーテは一生を通じて常に「もっと光を」求め続けた、あるいはゲオルク・ヴィトコフスキー (Georg Witkowski : *Goethe*. Leipzig 1899) が言うように、ゲーテは一生を

53) 平成9年9月11日付『毎日新聞』朝刊は、10日付けのフランス大衆紙『パリジャン』の記事として、次のように紹介している。「元妃に近づいて酸素マスクを装着しようとした時、最期の言葉『リープ・ミー・アローン』がその唇から二度、押し出されてきた。その後、元妃は意識を失い、二度と目覚めることはなかった。カメラマンらに追いかけて回されてその短い生涯を閉じた元妃の最期の言葉は、悲劇のプリンセスが求めてやまなかった静かな私生活を願う祈りのような言葉だった。」

54) Karl S. Guthke (注47), p. 71 に, “...the telling last words of ‘great men’ that are the historians’ stock-in-trade were ‘almost without exception invented post mortem.’ とあるによる。この文の引用は、巻末の注 (p. 208) によれば、William Lewis Hertslet et al., *Der Treppenwitz der Weltgeschichte* (Berlin, 1967), p. 16 となっている。

最期のことばの虚実

通じて「人類に大きな光をもたらす人」であった、あるいはまた、パウル・フィッシャー (Paul Fischer: *Goethes letztes Lebensjahr*. Weimar 1931) が、ゲーテは「もっと光を」とは言わなかったと認めた上で言うように、「ゲーテの全生涯は、自己の内心における、より多くの光と、より多くの耿耿としたエネルギーを求めての偉大な戦い、彼を取り巻く、また彼のほうへやってくる人類を照らす、より明るい、より暖かい光と愛と生命の光線を求めての偉大な戦いであり、彼は類稀なほど力を尽くし、誠実にこの戦いを遂行し、類稀な成果を収めた」(S. 165)⁵⁵⁾ のである。こうしたことばがゲーテ以上に当てはまる詩人はいないであろう。「もっと光を」は、偉大なゲーテの臨終にふさわしいことばであるからこそ、ゲーテの最期のことばなのである。ゲーテの実際の臨終の床から離れて、独り歩きをした「もっと光を」は、いわば既に一種の伝説、創作神話の領域に入っていると言えよう。それは経験的歴史的事実を超えるものであって、こうした最期のことばの真偽を問うことには、神話の真偽を問うことと同様、あまり意味はない。「もっと光を」は、臨終の床での日常経験的な意味の真実ではなく、ゲーテの死に方からゲーテの生き方を汲み取ろうとする、後世の文化人の集団意識の中で生み出された独自の真実であり、ある意味ではほんもの以上の魅力ある靈気に包まれているのである。その裏づけはゲーテの生涯が、あるいはゲーテの生涯に学ぶべきわれわれがするのである。最期のことばの正当性は、そのことばが秘めた当該人物の生にとっての、ひいてはまたわれわれの生にとっての意味にある。最期のことばの真実は、むしろわれわれがその人物をどう解釈し、その人物から何を学ぼうとするかに関わる問題である、と言えるであろう。

55) ロバートソン、ヴァイトコフスキー、フィッシャーの引用は、Karl S. Guthke: »Gipsabgüsse von Leichenmasken«? Goethe und der Kult des letzten Worts. in: *Jahrbuch der deutschen Schiller-Gesellschaft* 35 (1991). S. 73-95 によった。

[あとがき]

本稿は、平成9年11月8日富山県民会館で行なわれた日本ゲート協会主催の「講演と映画の集い」での講演『「もっと光を」の虚実 ——最期のことばとは何か——』及び、第22回成城大学公開講座の一つとして平成9年11月15日に行なった講演『最期のことばの虚実』の草稿を基にして、これらをまとめて論文調に加筆・訂正したものである。原稿の作成に当たっては、注に挙げた参考文献の中、とりわけハーヴァード大学教授カール・S・グートケ氏の著書・論文に負うところが多かった。また、資料の提供・貸与・閲覧・複写については、多くの先輩・同僚・知人のお世話になったが、就中、東京ゲート記念館、学習院大学、東京大学教養学部、慶応大学、愛媛大学各図書館・研究室のご好意を仰いだ。これらの方々や諸機関関係者に対し、ここに改めて深く感謝申しあげたい。